

“5th International Conference on Adjuvant Therapy of Primary Breast Cancer”に参加して

外科診療科

柳衛 宏宣

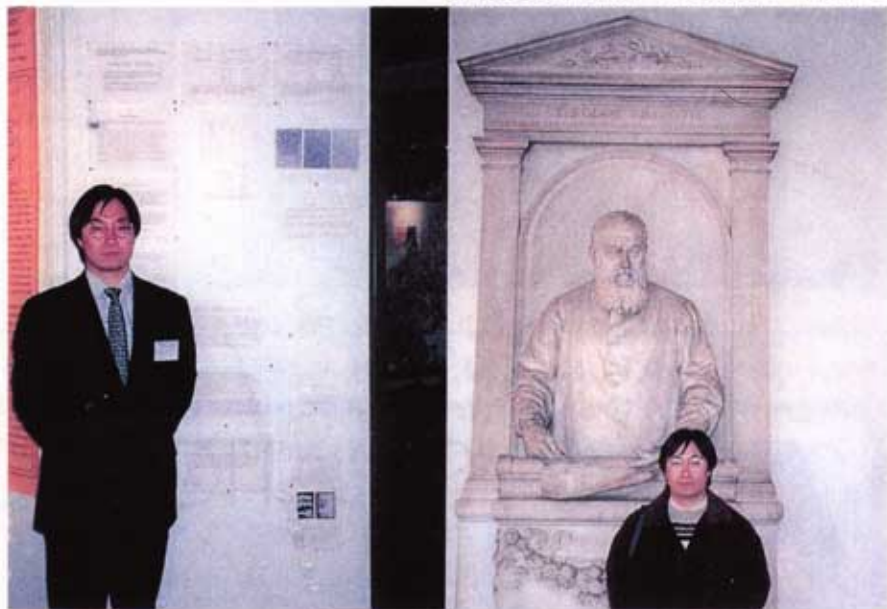
今回、国際交流基金にて、この国際会議に出席させて頂いたことを所長をはじめ東大医科研関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。3年に一度、St Gallen, Switzerlandにおいて開催されるこの国際会議は、乳癌に対する治療法を検討する臨床研究会議です。

我々は、中性子捕捉療法の乳癌治療への応用を考え、*in vitro*における乳癌の細胞障害効果を報告しました。中性子捕捉療法では、硼素原子を取り込んだ腫瘍細胞に熱中性子を照射すると、崩壊した硼素より誘発される飛程距離10 μ m以下の重荷電粒子によって細胞破壊が引き起こされるため、硼素原子を標的腫瘍組織に集積することができれば、熱中性子照射により、細胞単位の選択的な癌治療が行える可能性があります。熱中性子の到達深度を考慮すると体表の乳癌は標的腫瘍として十分治療効果が期待できると思われ、研究を続けているところです。

ヨーロッパ統合骨髄移植グループからは、転移性乳癌に対して自家骨髄移

植、末梢骨髄幹細胞移植を併用した大量化学療法を施行し、平均32ヶ月の経過観察中、28%もの患者に再発を認めない、というすぐれた報告がありました。北アメリカでは年間800例、ヨーロッパでは年間400例もの転移性乳癌に対して、自家骨髄移植、末梢骨髄幹細胞移植を併用した大量化学療法の症例が同一のプロトコルで検討されており、より良い治療薬、投与方法を見つけたそうとする行動力を感じました。また、Texas大学のM. D. Anderson癌研究所では、薬剤耐性遺伝子MDR-1を

左：会議場にて、右：ウィーン大学のビルロート像前にて



CD34陽性の骨髄幹細胞に組み込み、この骨髄幹細胞を併用した大量化学療法を乳癌や卵巣癌に应用することを考え、マウスモデルにおいて著明な延命効果を得、さらにヒトにおいてPhase 1の遺伝子治療臨床治験にはいっています。

今後、医科研においても、進行転移性乳癌に対して、骨髄移植や遺伝子治療を併用した大量化学療法を行うために、臨床各科および研究部のより密な協力体制が必須と思われました。

編
集
後
記

6月1日の医科研創立記念日も過ぎ、梅雨空を眺めながら記事の取りまとめを行ってきました。年度変わりの人事移動の季節も過ぎ、今回は記事の内容も通常の状態に復帰しました。これまで種々の記事をお願いしている諸先生方には、快くかつ手際良くご協力して頂き大変感謝しております。掲載が遅れている学友会ミセナーの記録等の報告も順次処理して行く予定です。

医科研では、今回紹介されておりますように、新たに4号館が竣工し、RI施設が一新されるとともに、発生工学に本格的に取り組む体制になって参りました。また、医科研の組織の運営に関してもその改革が真剣に議論されております。今後とも医科研の活動を皆様に紹介して行く上で医科研NOWが少しでもお役に立てる様努力して行きたいと思ひます。 (四)